

あまねく

amaneku

2023 vol.13



同志社大学 スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室

「あまねく」第13号発刊によせて

スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室長
松川 真美



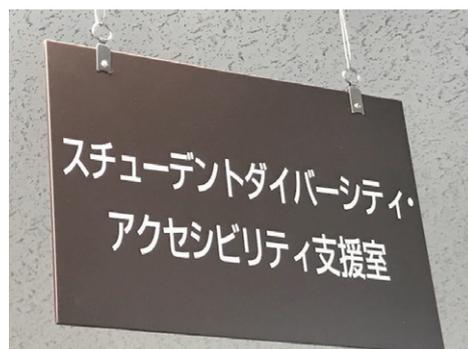
いまから70年以上も昔の1949年、同志社大学は日本で初めて点字で大学入試を実施しました。その後、身体の障がいを対象に物理的（バリアフリー化など）、人的（学生支援のコーディネーターやボランティアスタッフの登用など）な支援を広げ、2000年からは「障がい学生支援制度」として全学的な支援体制を構築しています。この広報誌「あまねく」の巻末には、本学の障がい学生支援の歩みが詳しく記載されています。毎年毎年、たゆまぬ進化を続けてきた支援の姿をぜひご覧いただければと思います。

さて、この歴史ある同志社大学の障がい学生支援ですが、近年は大きく変わろうとしています。まず身体の障がいに加えて、精神・発達障がいも支援の対象となりました。そして2021年の障害者差別解消法の改正です。この法律では私立大学においても「学生の学ぶ権利を保障し、その特性に合わせて合理的配慮を行う」ことが義務付けられます。これは本学らしく言い換えると「自主自立を目指すすべての学生に、等しくあまねく学びの機会をわたらせるための配慮を行うこと」となるのでしょうか。この配慮を受けることは、学生の権利でもあるのです。そして教育の現場では、学びの質を確保しつつ、障がいのある各学生の特性に合わせて、どのように合理的に配慮内容を策定するかが重要になります。もちろん、この合理的配慮は学生や履修科目の特性によっても異なることでしょう。本学のスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（SDA室）は奇しくもこの法改正とほぼ同時に発足しましたが、その主たる業務の一つは、この合理的配慮に関することです。具体的に配慮提案作成にかかわるとともに、学内で合理的配慮に関する理解を深める機会の提供も行っています。発足して2年を経過したSDA室ですが、これからも各学部、組織の皆様と協働で業務を進めてまいります。ご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

変化の二点目は、コロナの時代における障がい者支援のあり方です。コロナ下では完全にオンラインであった障がい学生支援も、2022年度からはオンライン+対面となり、各種の対面行事が再開されました。オンラインと対面の両手法を生かした複合的なサポートをどのように有機的に展開するか、SDA室ではスタッフの皆さんとともに新たな支援のあり方を俯瞰的に考え、発展させていきたいと考えています。

そしていま、世界では「多様性（Diversity）」を尊重する時代を迎えています。この「多様性」には国籍、性別、性的指向・性自認、文化、宗教、といった様々な概念が含まれます。同志社大学において、同じ志を持つ多様な人々が、すべからく、あまねく「個」を発揮できるキャンパスを実現することも、SDA室の使命の一つです。

このような背景のもと、広報誌「あまねく」が、本学における障がい学生支援の理念と取り組みを知っていただき、多様な人々の共生と発展を目指す社会の実現を願うすべての方々を繋げるための、新たな標となれば幸いです。



目 次

はじめに「あまねく」第13号発刊によせて	01
< 大学内行事開催状況 >	03
03 2022年度 入学式手話通訳 / 2022年度 入学式パソコン通訳 / 2022年度 オリエンテーション / 春学期始め顔合わせ会 / 新入生歓迎講演会 パソコン通訳 / 春学期フォローアップ勉強会	
04 春学期ランチタイム手話 / 秋学期ランチタイム手話 / 2022年度 新入生歓迎会 / 春学期末全体懇談会	
05・06 同志社大学 教育方法・教材開発プロジェクト 多様性×Forum Theatre ×マンガ	
07 第18回 Challenged キャンプ / 秋学期フォローアップ勉強会	
08 秋学期末全体懇談会	
09 同志社大学 150周年記念事業 手話造語	
10 複合領域科目「ダイバーシティ社会における障がい学生支援を考えるーアクセシビリティ支援の理論と 実践ー」	
< 社会貢献事業 >	10
10 大学コンソーシアム京都 ノート・パソコン (PC) テイカー養成講座 テイカー養成のためにー実体験をもとに背景や意義を考えるー	
11 パラスポーツ振興事業 第30回パラアーティスティックスイミングフェスティバル 第18回京都手話フェスティバル	
< スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援について >	12
< 同志社大学における障がい学生支援の沿革 >	13

(表紙写真：同志社大学提供)

大学内行事開催状況

2022年度の授業形態は、対面授業とネット配信授業での2形態となり、SDA室主催行事も対面に戻ってきました。直接顔を合わせることで生まれる表情とともに2022年度の活動を報告します。

●2022年度 入学式手話通訳

開催日・場所：4月1日（金）京田辺校地 デイヴィス記念館
協力スタッフ：3名

【手話通訳スタッフの声】

藤井 亮汰（手話通訳）（社会学部社会学科 2年次生）

私が「手話」という言語に出会い、興味をもったのは高校2年生の秋。きっかけは、中学1年生の頃から漠然と持っていた「アナウンサー」という夢でした。「社会の様々な出来事を聴覚障がいのある方々にも、健聴者が得られる情報と同じように伝えられるアナウンサーになりたい」そう考え、思い切って地域の手話サークルに参加しました。実際に手話に触れてみると自分が思っていた以上に奥が深く、そして魅力的な言語だと感じ、もっと知りたいという気持ちになりました。この気持ちは今も変わらず、ずっと持ち続けています。今回、入学式の手話通訳のお話をいただいたときは、驚きとともに、今まで一生懸命取り組んできた手話を多くの人に見ていただけるという思いで胸が熱くなりました。実際の手話通訳経験がなかった私にとって、自身の通う大学の入学式で初通訳が経験できるというのは、この上ない喜びでした。絶対に成功させるという強い思いで挑戦させていただきました。



初めての通訳を経験して率直な感想として、とても楽しかった！

もちろん、多くの方の前で表現することに緊張や不安もありました。通訳をしている時に、私の手話表現を真剣に見てくださる方々と目が合ったその瞬間、障がいの有無に関わらず、手話という言語を通じたつながりを実感しました。それからは、1人でも多くの方に「伝えたい」というその一心で夢中になって表現しました。感情やその場の雰囲気や伝わるように、手の動きだけではなく、身振り、目線、うなずき、そして何より「表情」を大切にしました。このご時世、テレビの会見などで手話通訳を見たことがあっても、なかなか身近で手話という言語に触れる機会は少ないと思います。

この入学式を機に手話という言語を身近に感じてもらい、興味を持っていただければ幸いです。私自身、これからも手話の勉強に励みながら、有意義な学生生活を送っていききたいと思います。そして、この経験を将来に繋げられるよう一層努力していききたいと思います。素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

●2022年度 入学式パソコン通訳

開催日・場所：4月1日（金）京田辺校地 デイヴィス記念館
協力スタッフ：4名

【パソコン通訳スタッフの声】

野口 満理奈
（パソコン通訳スタッフ）
（政策学部政策学科 3年次生）

私が今回入学式のパソコン通訳（PC通訳）に応募した理由は、授業通訳の活動とは異なる、新たな経験ができることにワクワクしたからです。私自身、式典での活動に携わるのは今回の入学式が初めてでした。授業時の通訳活動も、利用学生さんにより正確な文字情報を提供するため、責任感を持って取り組んでいますが、式典ではたくさんの目の触れる情報を届けるということ、授業とは異なる緊張感の中、とても貴重な経験をすることができました。2年次生の春学期、利用学生さんと講義が同じだったことをきっかけに、SDA室の存在を知りました。「だれかのために」という思いではじめて活動でしたが、SDA室のサポートスタッフを通して、様々な方に出会い、私自身たくさんのことを学ばせていただいています。今後も素敵な方々に囲まれてこのような活動に関わることに誇りを持ちながら、PC通訳をはじめ、様々な活動に積極的に参加していききたいと思います。



●春学期始め顔合わせ会

開催日・場所：4月5日（火）
オンライン
参加者数：50名

●新入生歓迎講演会 パソコン通訳

開催日・場所：4月27日（水）
京田辺校地 恵道館 201教室
オンライン併用
協力スタッフ：4名

●2022年度 オリエンテーション

開催日・場所：4月4日（月）～7日（水）
今出川校地 寒梅館
京田辺校地 多目的ホール内
協力スタッフ：14名



●春学期フォローアップ勉強会

サポートスタッフ向けにフォローアップ勉強会を開催しました。特にサポート活動が初めての方には、活動を始めにあたり勉強会に参加していただくことをお勧めしています。サポート活動のスキルアップや、疑問点の解決に活用していただきました。また、一部の講座でオンデマンド講座の配信を開始しました。

開催日・場所：
4月12日（火）
～7月11日（月）
オンライン
参加者数：延べ79名

障がい学生支援
2022年春フォローアップ勉強会 4-5月

フォローアップ勉強会を開催いたします。
新入生スタッフの皆さんも、すでにサポートに入っている皆さんもぜひ積極的に参加してください。

【参加費】 無料
【時間】 20分程度（5月12日のみ30分程度）
【場所】 今出川校地 寒梅館 201教室
（オンライン配信も同時進行で行います）
【対象】 オンライン受講生・通訳・サポートスタッフ
（通訳・サポートスタッフは、事前に申し込みが必要です）

※参加費は、事前に申し込みを済ませた方のみです。
※参加費は、事前に申し込みを済ませた方のみです。
※参加費は、事前に申し込みを済ませた方のみです。

【5月12日のみ】に関する勉強会
※5月12日のみは、オンライン配信も同時進行で行います。

ノートPC講座	パソコン通訳講座
①4月12日（火）3講時	■講義 ■お申し込み不要
②4月15日（金）3講時	②4月22日（金）3講時
③5月12日（水）3講時	③5月10日（火）4講時
	④5月25日（月）3講時

※実際は基礎を受けた方が対象です。

【勉強会参加者の声】

今回、私は captiOnline という PC 通訳ソフトを使った PC 通訳基礎講座に参加しました。機能の説明や使い方をレクチャーしていただき、参加者全員で実際に文字入力を体験しました。その後、ペアで PC 通訳を実践。音声を聞き、2～3文節に区切ってペアで交互に文字入力していくのですが、どこで入力を交代するか等、お互いにタイミングを合わせて進めていくところが難しくもあり楽しいところでした。また集中力を要する作業なので、個人的には集中力の向上にも繋がると感じました。初めての参加でしたが、参加者の方と画面を通してコミュニケーションを取りながら進めていただけたところが大変わかりやすく助かりました。また、タイピング技術のスキルアップなど自身も成長しながら、誰かの役に立てることが PC 通訳の魅力だと感じました。今後もこのような勉強会があれば、またぜひ参加したいです。

●春学期ランチタイム手話

開催期間・場所：4月～7月 第2・第4水曜日
今出川校地寒梅館1A会議室及びオンライン
参加者数：約10名/回
講師協力：2名(利用学生・学生スタッフ)

●秋学期ランチタイム手話

開催期間・場所：9月～1月 第2・第4水曜日
今出川校地 良心館101教室 京田辺校地 知真館3 103教室
参加者数：約10名/回
講師協力：3名(利用学生・学生スタッフ)

開催期間中に昼食をとりながら楽しく手話を学べる場を設けています。2022年度は対面とオンラインでのハイブリッド開催となりました。学生が講師として司会進行を行い、毎回テーマを決めて手話での会話を楽しみました。手話を通じて学部・学年を超えた交流ができる貴重なコミュニケーションの場にもなっています。



【ランチタイム手話参加者の声】

今まで手話は未経験でしたが、初めてランチタイム手話に参加させていただきました。全く手話の知識がない状態での参加でしたが、講師の学生さんや、手話を知っている参加者がわかりやすく教えてくださったおかげで楽しい時間となりました。今回オンラインで参加したのですが、画面上で示してくださる手話をまねて、自分の名前や指文字、国や地域の名前をいくつか覚えられました。少しですが、自分の伝えたいことを手話で伝えることの喜びが実感できました。手話の由来や成り立ちを聞くことができたのも大変興味深く勉強になりました。難しいイメージがあった手話ですが、「なぜこのような表現になったのか」という成り立ちを聞くと楽しく覚えられるので、引き続き、ランチタイム手話に参加させていただきます。

●2022年度 新入生歓迎会

開催期間・場所：6月14日(火)今出川校地 寒梅館地下A会議室
オンライン併用
7月1日(金)京田辺校地 成心館207会議室
参加者数：20名(今出川校地) 7名(京田辺校地)

【新入生歓迎会参加者の声】

越智 愛佳(文学部英文学科/1年次/サポートスタッフ・利用学生)

私は入学してすぐにサポートスタッフになりました。私自身、生まれつき弱視で授業の際に合理的配慮が必要なため、利用学生としてもSDA室にお世話になっています。サポートを始めたきっかけは、高校の恩師の言葉です。現役で受験がうまくいかず悩んでいたときに、「あなたにしかできない強みを見つけたらいい」という助言をいただきました。そこで、自分も不自由さがわかるからこそ、サポートスタッフとして力になれるらという思いで始めました。今までは周りに同じ境遇の人が少なかったため、よくマイノリティな存在を感じたり、見た目からは理解を得にくいこともあったりして密かに悩んでいました。しかし、先日行われたSDA室の新入生歓迎会で、ハンディキャップがありながらも活動的に趣味や勉強に励んでいらっしゃる利用学生の方々や、優しさ溢れるスタッフの方々や交流することで、前向きな気持ちになりました。入学前は同志社大学にこのような支援機関があることを知りませんでした。合理的配慮に理解のある大学に入学できて嬉しく思います。サポートスタッフとして、今はノートテイクをしていますが、今後はPCを使ったサポートもできるようなりたいと思っています。新島裏先生の「一人は大切な人」という言葉のように、少しでも多くの人々が生きやすい世の中になってほしいです。

近藤 成(文学部国文学科/1年次/利用学生)

SDA室の新入生歓迎会に参加させていただいて、サポートスタッフ、利用学生問わず、学部、学科や学年を超えたたくさんの方とお話することができ、自分の視野が広がったと感じています。私が同志社大学を志望したきっかけは、学びたいと思っていた国文学の講義が充実していると知ったことでした。その後、受験時や入学後の支援についてSDA室に相談させていただいたときに、一人ひとりのニーズに合ったサポートをしてもらえることを知り、また、あなたが言葉がたくさんかけてもらったことで、絶対に同志社大学に行こう!と決めました。入学して2ヶ月と少し経ちますが、たくさんの方が気にかけてくださるおかげで困ることもほとんどなく、毎日とても楽しく過ごしています。サポートスタッフの皆さんも密にコミュニケーションを取ってくださり、「こうしてほしい」とお願いしたときにはすぐに対応してくださって、本当に感謝しています。

【新入生歓迎会幹事の声】

桜木 明日美(文学部文化史学科/3年次/サポートスタッフ)

SDA室のサポートスタッフに登録したきっかけは、入学時にパンフレットを見たことでした。入学してから約半年間、すべてオンライン授業となり大学に通うことができなかったので、同じ大学の学生とつながるきっかけにしたいと思い、登録しました。私は、普段の活動の中で、同じサポートスタッフの学生さんに会う機会は少なく、またサポートをしている利用学生さんとも短い休み時間のなかで話す機会が少ないことを残念に思っていました。そこで今回の新入生歓迎会では、お互いを知るために自己紹介の企画を用意しました。当日は、その企画をきっかけにして、サポートに関することはもちろん、日常のことなどにも話を広げ、自然な会話を楽しむことができました。

もともと大学では日本史の勉強をしたいと考えていて、日本の古都・京都にある同志社大学を選びました。今はゼミで近世の薩摩藩について調べていて、かつて薩摩藩邸があった今出川のキャンパスに通っていることが嬉しいです。

●春学期末全体懇談会

開催日・場所：8月2日(火)
今出川校地 至誠館S33教室
参加者数：41名

2022年度は、コロナ禍になりはじめての対面開催となりました。今回は、「SDA室ってどんなところ?～支援体制とそれぞれの役割について知ろう～」をテーマに、この機会に当室について理解を深めることを目的とし、31名の学生が参加しました。参加学生は途中、数名ずつのグループに分かれ、SDA室に登録している利用学生・サポートスタッフそれぞれが、どのような困り感を抱えているのか、またどのような場面でSDA室を利用するのかということを疑似体験してもらうグループワークの場を設けました。これによりお互いの立場を尊重し、今後の支援に役立ててもらうきっかけとなりました。

●同志社大学 教育方法・教材開発プロジェクト
多様性×Forum Theatre×マンガ

開催期間・場所：8月～2023年1月
ワークショップ 8月12日(金)
京田辺校地 多目的ホール
参加者数：12名



差別やハラスメントを目の当たりにしても、その場で反応できず、悔しい思いをしたことはありませんか？『多様性×Forum Theatre×マンガ』のワークショップでは、フォーラムシアターという参加型の劇を通じて、ハラスメントや差別に立ち向かう方法を実践的に学び、一緒に考えました。

同志社大学 教育方法・教材開発プロジェクト

多様性×Forum Theatre×マンガ

～実践について考えよう！～

差別やハラスメントを目の当たりにしても、その場で反応できず、悔しい思いをしたことはありませんか？本ワークショップではフォーラムシアターという参加型の劇を通じて、ハラスメントや差別に立ち向かう方法を実践的に学び、一緒に考えます。演劇と絵の描き方をマンガにして公開し、同志社学内で問題点と解決策を共有します。

フォーラムシアターとは？
アザリラの演出家アグスト・ゴアルム氏が1970年代に考案した「参加型演劇」の一種で、自覚的な市民（観客・ハラスメント者）を題材にした参加型の劇です。観客は観るだけでなく、役者との対峙から、自分らの解決策を舞台で実践します。その後、参加者間で解決策について話し合います。問題解決の力を身につけることができます。最近ではワークショップでも活用されています。

プログラム

10:00
11:00 **第一部** **フォーラムシアター**
参加型の演劇で目撃における差別について考えよう！
12:00 **ファンリテーション**
内山唯日 (Bridge Project 代表)

14:00 **休憩**

15:00 **第二部** **マンガのストーリー作成ワークショップ**
第一回のフォーラムシアターの体験に基づいて多岐用途のためのマンガを作り、発信について考えよう！
16:00 **ファンリテーション**
池乃大 (漫画家)
ベティーナ・ギルデンハルト (グローバル・コミュニケーション学部准教授)

17:00

日時 2022年8月12日(金)
10:00 - 17:00

会場 京田辺校地・多目的ホール

定員 20名(先着順)

申し込み
8月3日までに

プロジェクト主催者：ベティーナ・ギルデンハルト
協賛：学生課のチーフ・ニュープロジェクト・ハートランド、アカデミック・イノベーション (SRA)
TEL【京田辺】:0774-65-7411 / E-mail:do-core-stf@mail.doshisha.ac.jp



【コアメンバーの大田竜聖さんへインタビュー】

- Q：事前勉強会から始まりましたが、特に印象に残っていることは何ですか？
A：事前勉強会は、私が聴覚に障がいのあるマイノリティの当事者として、生きづらさを発表させていただいたんですけども、やっぱりマジョリティの人に気づいてもらうってということがものすごく大事なんだなっていうことに気づきました。
- Q：マイクロアグレッションの台本作りに関してはどうでしたか？
A：そうですね、聴覚障がいの話について、台本を皆さんと作ったんですけど、どの人がどの役をするかということについて、なんて言うのか、当事者が抱えている問題点っていうのをマジョリティの人たちに感情移入してもらったことで、理解していただけたように感じて、嬉しい気持ちになりました。
私たちマイノリティってこういう気持ちをもっているというか、こういう生活を送っているっていうか、こういう状況に直面するんだよっていう感情です。
- Q：台本から漫画(ストーリー)を作成しましたが、それに関してはどうでしたか？
A：はい、漫画なので描ける情報量っていうか、実際の動きではなく、ものすごく凝縮されるんですけども、この漫画で何が言いたいのかっていうのを、人に分かりやすく伝える必要がありました。それを念頭に四つの場面を作ったんですけども、分かりやすく伝えるにはどういうイラストがいいのかなとか、どういう字体でどういう色使いで、漫画特有のアイコンだったりとかを、どう駆使すれば伝えられるかなっていうところを真剣に考えてました。やっぱりマイノリティとして、しょうがないから時々飲み込んだりうんですよね。でも、気持ちを表現する必要性は、日常生活の中にもやっぱりありますね。

●第18回Challengedキャンプ

開催日・場所：8月29日（月）～8月31日（水）

同志社びわこリトリートセンター

参加者数：20名（教職員含む）

2022年度の第18回Challengedキャンプは、念願の2泊3日のキャンプが叶い、2名のZoom参加を含め、総勢20名とともに同志社びわこリトリートセンターで開催しました。

このキャンプは、参加者が実際の障がい（疑似）体験をすることで、普段の日常生活では気づかないことに気づき、障がいへの理解を深めると共に、自分自身の心の中にあるバリアと向き合い、それをキャンプでしか提供し得ない空気感の中で素直に交換/共有することを通して、一人ひとりが心身共に成長することを目的に2005年からスタートしました。



【参加学生の声】

文学部 3年次生

私がChallengedキャンプに参加した理由は二つあります。一つは、サポートスタッフとして活動するなかでの悩みについて考えるきっかけにしたいと思ったこと、もう一つは、SDA室に関わる方と交流する機会をつくりたいと思ったことです。

キャンプでは、自分の気持ちが動く経験が多くできました。例えば、アイマスクをつけて見えない状態で移動するとき、景色は見えなくても光を感じるの、明るいところから暗いところに入ると怖いと感じたことが印象に残っています。こういった体験は実際に障がいを持つ方の日常の一部ではありますが、その気持ちを少しでも自ら感じられたことが、私にとって大切な経験になりました。

また、参加者の皆さんと意見を共有する機会がたくさんあり、自分の悩みや考えを言葉にして整理するきっかけになりました。

今回のキャンプでは、コミュニケーションを通して得たことが多くありました。これからのサポート活動で、積極的に思いを共有することを意識したいと思っています。



法学部 2年次生

私がChallengedキャンプに参加したきっかけは、普段サポートさせていただいている利用学生の方が感じている、障がいの悩みやつらさといったものを少しでも多く学びたいと思ったことです。

キャンプに参加した感想としては、今までにない経験が多くでき、本当に参加してよかったです。また、他の参加者の方々と話し合うことで得られたことも多かったです。

また、このキャンプで得たことの中で特に大きかったのが、障がいについてまだ知らないことが非常に多いということです。具体的に言えば、他の障がいや他の人にはないような特有の悩みがあることです。そのようなことはその方に教えていただけなければわからないことも多く、先入観をもたずに学んでいくことも大事だと強く感じました。

今回学んだことはサポート活動だけでなく日常生活においても活かせることだと思いますし、今回考えたことを、未来に向けてさらに見つめ直す姿勢を大切にしたいです。ぜひ次回も参加したいです。



心理学部 3年次生

私がChallengedキャンプに参加したのは、今までに障がい者の方に声をかけようとしてできなかった経験が多かったからです。通学している、白杖を持った方、車椅子に乗られた方をよく見かけます。その方々を見ると、自分は何をするべきなのかと思っていました。

しかし、Challengedキャンプで実際に障がい体験することは、理解するうえでのきっかけになりました。目隠しして電車を利用するとき、どこからが乗車口なのか怯えて乗りました。また、電車の騒音は強いストレスを感じました。障がい者の方にとっての社会的障壁、バリアフルとはどういうことなのか。今まで見えていなかった世界が、私の中で少しながら光が灯り、見えるようになったと思います。

話はわかりませんがキャンプが終わって一週間後の出来事です。通学中、私の隣に白杖を持った方がお掛けになりました。縦座席の車両で、その方はどちらに寄れば介助の方が座れるのが悩まれていました。私はまた、どうすればいいのかわからず、コミュニケーションがとれませんでした。まだ、身体が動きません。私が手助けするには長い道を歩いていかななくてはならないですが、今回の学びを糧に一歩一歩前を進みたいと思います。



●秋学期フォローアップ勉強会

開催日・場所：10月4日（火）～12月8日（木）

オンライン

参加者数：延べ22名

障がい学生支援
2022年度秋学期フォローアップ勉強会 10～12月

フォローアップ勉強会を開催いたします。
新規スタッフの皆さんもすでにサポートに入っている皆さんもぜひ積極的にご参加ください。

<p>【開催日】10月～12月 30分～45分程度にご参加ください。</p> <p>【場 所】Zoom開催 ガイドヘルプ講座のみ対面（今金川校地）</p> <p>【内 容】ノートテイク / パソコン講座 本学が提供する支援サービスについて 代筆がベテラスタッフでも行われます</p>	<p>参加される方は 本学からの登録（金庫を兼ね）までに SDA室のメールフォームから 申し込みをお願いします。</p> <p>後日ZoomのURLをお知らせします。</p>
---	---

【書くことへのサポート】に関する勉強会

<p>ノートテイク講座</p> <p>講義時間 ①10月5日（水）30分 ②10月20日（木）30分</p>	<p>パソコン活用講座</p> <p>講義時間 ③10月6日（金）30分 ④10月14日（金）30分 ⑤11月7日（月）30分</p>
---	--

※参加費：Google Chrome（最新バージョン）とZoomクライアントをインストールしていただく必要があります。
※参加は事前登録を必ず済ませます。Zoom/Officeをインストールしていただく必要はありません。

●秋学期末全体懇談会

開催日・場所：2023年2月17日（金） 今出川校地 尋真館 Z40 教室
参加者数：44名（教職員、オンライン参加含む）



秋学期末懇談会は春学期をふまえ、コロナウイルス感染症対策を徹底し、より多くの利用学生・スタッフが参加しやすい環境を整えるため、対面およびオンラインでのハイブリッド開催を実現しました。今回は、秋学期に実際の支援に携わったスタッフと支援を必要とする利用学生の対談を参加者全体に向けて行いました。その後、グループにわかれ、学期を通して感じたことや支援に対する想いなどを話し合っていました。春学期に向けてお互いの存在意義を理解し、終始、円滑なコミュニケーションをとる様子が伺えました。最後に「上級生から下級生へ伝えたいこと」を事前に集めメッセージ集として配布しました。SDA室の活動を通して得た貴重な体験や学び、そして意思を残された後輩たちが引き継ぐという、良い機会になりました。

【懇談会に参加してくれた学生の声をご紹介します】

利用学生：文学部国文学科・1年次生

サポートスタッフの方に直接要望や自分の障害の状態を伝えたりすることがあまり無かったのですが、今回のディスカッションで、言いたいことはむしろ伝えてくれた方がいっていただいたことで、今後は今までより気軽に相談できるかもしれないと思いました。こういったディスカッションの場が設けられることで、お互いにたくさん得たものがあると思います。本当にありがとうございました。

サポートスタッフ：文学部・4年次生

今回のディスカッションでは、障がいに対する理解を促すことや、SDA室の活動について周知する方法について話し合うことができ、私にとってはとても有意義な時間でした。これまでの懇談会では、利用学生とスタッフ間の支援をいかにスムーズにできるかという議題が多かった気がしますが、より良い支援にするためには、先生や他の学生を含め、周りの理解が必要だということをグループ全体で共有できたことがとても良かったです。

支援はチームとして取り組んでいくべきものだというのを改めて再確認できた気がします。



【松川先生からのメッセージ】

SDA室長の松川先生は、公務出張と重なったため、出張先であるフランスのマルセイユの街（写真）を背景にビデオメッセージをくださいました。

“この一年、私も、いろんな経験を積ませていただきました。実は私はSDA室長になってからまだ一年目なので、一年坊主なんです。

2020年のコロナが問題になった時からバーチャルになりました。バーチャルというのは、これまで経験なかったんですが、やってみると、いろんなことができるなということに気がつかれたのではないかなと思います。そして2年が経ち、この2022年度からは対面授業も始まりました。つまりバーチャルとリアルの両方で支援ができる状態になったわけです。「新たな支援元年」とも言えるかもしれません。これからの支援の在り方は、ますます多様化していくと思います。その中で何が最適な支援なのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

そして支援をされる側であった皆さん。皆さんはされる側であってだけではないです。スタッフや、そして支援をする側の皆さんにとって大変貴重な学びの機会を与えていただきました。ありがとうございました。”



●同志社大学150周年記念事業
手話造語

入学式や卒業式・学位授与式等、同志社において重要な行事に手話通訳が配置されていますが、「新島襄」「良心教育」「侗儻不羈（てきとうふき）」にあたる手話がありませんでした。

同志社150周年記念事業の一つとして、新島襄並びに新島の思いを表現する言葉についてオリジナルの手話を作成しました。作成にあたっては、卒業生の利用学生やサポートスタッフに協力を頂き、同志社の歴史の振り返りと共に考案していきました。

2022年11月29日（火）15:00～17:10に開催された【2022年度】同志社創立150周年記念イベント「Doshisha New Day」において披露する機会をいただき多くの方に周知することができました。

同志社手話造語



にいまじょう 新島襄



[新] <新しい>

すぼめた手をぱっと下前方に出して広げる

りょうしんきょういく 良心教育



[良] <(良)心>

右手の開いた五指を下から天の方向へ握りながら力強く移動する

てきとうふき 侗儻不羈



[侗] <自分>

右人差し指を胸に当て、前にはねあげる



[島] <島>

左手の全指を曲げて手のひらを下にし、その周りを右手のひらを上に向けて回す



[心] <満ちる>

左手を『良』の右手の向こう側に殻のようにかざし、右手を開きながら右手の甲を左手のひらに重ねる



[儻] <才気>

右手の親指と人差し指を閉じて頭に当て、はじくようにして上方に開く



[襄] <七>:七五三太と<ジ>:襄より

右手の親指と人差し指と中指を出して、親指の指先を上に向け左側から弧を描いて右へ移動する



[教育] <教育>

右人差し指をこめかみ付近から手首を軸にして2回振り下ろす



[不羈] <自由>

両手こぶしを肘を使って交互に上下させる

「新しい」と「島」はすでに相当する手話があり一般的に使われていることから同様の表現を用いることとした。「襄」は幼名である七五三太（しめた）の「七」の意味と襄の「ジ」で弧を描き七五三太から始まる襄の生涯を表した。

開いた五指を少し下から天の方向へ全て折り曲げ力強く表現することで新島の希求した『(良)心』の意を込めている。また満という言葉を表すことで「充滿したる」を表現し「教育」の手話を加えて良心教育とした。

個性を尊重し独立した自身という意を込めた「自分」と「才気」「自由」を表すことで独立心の旺盛さと才気が優れた個性を伸ばしていくことを表現した。新島は「侗儻不羈」なる生徒を型にはめることなく自発的に行動して本性を発揮することを願っていた。



●複合領域科目

「ダイバーシティ社会における障がい学生支援を考えるーアクセシビリティ支援の理論と実践ー」

開講期間・場所：9月26日（月）～2023年1月23日（月）

今出川校地 良心館105教室 およびオンラインのハイブリッド



※本授業は SDA 室長を科目代表とする科目です。

2022年度の複合領域科目「ダイバーシティ社会における障がい学生支援を考えるーアクセシビリティ支援の理論と実践ー」は、例年どおり次の3点を到達目標として、秋学期に直面(今出川校地)とリアルタイムオンラインのハイブリッド形式で開講されました。

- ①障がい者 / 学生自身、およびそれを取り巻く人と環境を「ダイバーシティ（多様性）」の視点で包括的に捉え、その現状と課題を理解できるようになる。
- ②障害者差別解消法に依拠し、障がい者の権利保障としての「合理的配慮」、および高等教育機関における「アクセシビリティ支援」の内容を理解し、そのあり方を考察できるようになる。
- ③主体的な学びを起点として、多様な他者・社会に対して包括的に課題解決に向かう姿勢をもつことができるようになる。

今年度は、従来の身体障がいをメインとした構成に加え、精神・発達障がいや特別支援教育の領域を取り込むなど、より多様性のある授業構成として、6人の教員がそれぞれ趣向を凝らして受講生の興味関心を幅広く喚起し、考察をリードしました。

本授業は、大学コンソーシアム京都の単位互換科目であることに加え、リアルタイムオンラインでの受講を可能としたことから、本学の学生だけでなく、府下8大学からの受講生を迎えました。本授業の特徴のひとつである少人数に分かれたディスカッションでは、所属する大学の垣根を超えた活発なやり取りがあり、お互いに刺激を与えあったことが、毎回の授業後に課された小レポートからもうかがうことができました。

最終的に27名の提出があったレポート試験では、受講生それぞれの視点から到達目標に沿った多様な論考が良せられ、教員一同は来年度のよりよい授業の提供へと思いをあらたにしました。

	内 容
授業内容	1 ガイダンス／本学のあゆみ
	2 障がいとは何か／合理的配慮とは何か
	3 障がい者の権利保障と法整備
	4 日本の高等教育機関における障がい学生支援
	5 障がい者スポーツにおける「障がい」を考える
	6 合理的配慮を考える①：聴覚障がい体験と支援
	7 合理的配慮を考える②：視覚障がい体験と支援
	8 合理的配慮を考える③：肢体不自由体験と支援
	9 合理的配慮を考える④：精神・発達障がい学生への支援
	10 特別支援教育と合理的配慮
	11 社会における支援事例
	12 企業における支援事例
	13 障がい学生支援の事例
	14 障がい学生支援の経験から（当事者OB登壇）
	15 授業内評価・ふりかえり

社会貢献事業

●大学コンソーシアム京都 ノート・パソコン(PC)テイクー養成講座
テイクー養成のためにー実体験をもとに背景や意義を考えるー

開催日・場所：9月20日（火） オンライン

内 容：講話・パソコン通訳

協力スタッフ：5名

DOSHISHA UNIVERSITY

ノート・パソコン(PC)テイクー養成講座

テイクー養成のために
ー実体験をもとに背景や意義を考えるー

聴覚障がい学生への情報保障
～同志社大学を事例に～

大田 竜聖(同志社大学政策学部3年次生)
新谷 凌平(同志社大学大学院 社会学研究科 博士前期課程)
大和田 宗(同志社大学大学院 法学研究科 博士前期課程)
土橋 恵美子(同志社大学SDA室 チーフコーディネーター)



● パラスポーツ振興事業
第30回パラアーティストックスイミングフェスティバル

開催日・場所：10月2日（日） 京都市障害者スポーツセンター
内 容：パソコン通訳
協カスタッフ：3名



● 第18回京都手話フェスティバル

開催日・場所：2023年1月29日（日） 京都新聞文化ホール
内 容：パソコン通訳
協カスタッフ：4名

2023年1月29日（日）、京都新聞文化ホールにて「第18回京都手話フェスティバル」が開催され、サポートスタッフとして活動している学生が、パソコン通訳（PC通訳）として参加してくれました。今回は、学外でのPC通訳を初めて経験したサポートスタッフのレポートを紹介します。

【参加学生の声】

藤井 涼太郎（パソコン通訳スタッフ）（法学部法律学科1年次生）

中学生の頃、学校で行われた講演会でパソコン通訳（PC通訳）の存在を知りました。当時は、講演されている方が話された内容を素早くPCに打つ作業を「カッコイイな」と率直に思っていました。今回、京都手話フェスティバルのPC通訳募集メールがSDA室から届き、PC通訳の仕事について詳しく理解することは、今後、パソコン通訳者として支援を行っていくうえで必要な経験であると考え、応募しました。

学外でのPC通訳活動は初めての経験でドキドキしながら会場へ向かいました。多くの観客の方に対して、リアルタイムで正確に情報を伝えなければならないという責任の重大さから、最初はかなり緊張しました。当日は、私以外PC通訳の経験が豊富な3人の先輩と一緒にサポートをしました。私の役割は、事前に用意された手話スピーチ原稿をもとに、発表者がスピーチした内容と字幕が合致するように文字を表示していくことでした。原稿はありますが、発表者が原稿通りに発表するとは限らず、多くの発表者がその場の雰囲気に合わせてアドリブを加えて発表されました。

私は、今回の経験を通して「言葉は生きている」と強く実感し、「通訳の難しさ“や”パソコン通訳とは何か？“ということを先輩方から教わりました。今後も多くの現場へ足を運び、情報保障を必要としている方から「パソコン通訳があって本当に助かった。話している内容がよくわかった」と言ってもらえるように、スキルを磨いていこうと思います。



スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室について

● 2022年度サポートスタッフ登録・活動の状況

登録状況

(単位：人)

2022年度	サポートスタッフ	学生	一般	合計
春学期 (8月現在)	登録者数	123	19	142
	活動者数(4月～8月)	58	7	65
秋学期 (2月現在)	登録者数	123	19	142
	活動者数(9月～2月)	53	5	58

週当たりの派遣コマ数(2022年度春)

(単位：コマ)

活動内容	両校地
代筆	2
対面朗読	1
PC通訳(遠隔、3名体制含む)	13
生活支援	2
食事介助	1
ノートテイク	5
ポイントテイク	9
授業補助	7
移動介助	24
合計	64

週当たりの派遣コマ数(2022年度秋)

(単位：コマ)

活動内容	両校地
代筆	2
PC通訳(遠隔、3名体制含む)	10
生活支援	2
食事介助	1
ノートテイク	5
ポイントテイク	19
授業補助	6
移動介助	12
合計	57

1. 本学における障がい学生支援のあゆみ

同志社大学の障がい者支援は1949年に遡る。入学試験において、日本の大学で初めて点字受験の対応を開始した。1975年、点訳・墨訳担当者を配置し、試験問題の点訳を開始。1982年には学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置し、これを契機に今出川校地内建物入口スロープや自動昇降機を設置、1984年からは語学テキストの点訳業務を開始した。

1986年、京田辺校地の開校にあたり、キャンパスの基本設計から全面的なバリアフリー化をはかり、図書館内には点字室や対面朗読室を設けた。

2000年3月、「障害者問題委員会」からの学長宛て答申を契機として同年5月「障がい学生支援制度」がスタートし、翌2001年に同委員会からの再答申により、講義補助から講義保障へと一段と踏み込んだサポートが開始された。この際、一部の支援で、サポートスタッフの活動を有償化した。

2002年には「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更し、学内の障がい学生の総合的相談窓口を、学生部に一本化、2004年、今出川・京田辺の両キャンパスに常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置し、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)との連携協力を開始した。

2006年には日本学生支援機構(JASSO)の「障がい学生就学支援ネットワーク事業」の拠点校として連携協力を開始し、2007年にはアシスタントスタッフ(有償)とボランティアスタッフ(無償)を統一し、「サポートスタッフ」として全

支援を有償化した。

2008年、「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編するとともに、学生支援センター内に「障がい学生支援室」を設置した。

2009年秋より、事務組織上、障がい学生支援室を京田辺校地学生支援課に一元化した。

2014年秋に発足した全国高等教育障害学生支援協議会(AHEAD JAPAN)に発起人校として参加した。

2016年4月の「障害を理由とする差別解消の推進に関する法律(障害者差別解消法)」施行に伴い、2018年4月に障がい学生支援制度の一部見直しを行い、修学支援に関する申請から合理的配慮の決定手続きまでの過程を明確化するとともに、支援内容については学生とその所属学部(大学)が合意をとる形式とした。

2. スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室

2021年4月、障がい学生支援室が改組され、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室(SDA室)が開設された。現在、SDA室には専属の障がい学生支援コーディネーターが常駐しており、障がいのある学生に対して学生サポートスタッフの協力を得て、授業保障に関わるサポートを行っている(授業保障とは、障がいのある学生が希望するすべての授業について、一般学生と同じレベルで受講できるよう保障することである)。

同志社大学における障がい学生支援の沿革

1937年	ヘレン・ケラー女史、同志社女子部で講演
1949年	大学入学試験において点字受験対応を開始（日本の大学では初）
1952年	同志社大学盲学生友の会（盲友会）結成、盲友会による授業支援開始
1975年	教務課に非常勤の点訳・墨訳担当者を配置 試験問題の点訳を開始、1984年度より語学テキストの点訳業務開始
1982年	大学長の諮問機関として「障害者問題委員会」設置（1982年4月）を契機に、以後順次今出川校地内の建物入口スロープや自動昇降機等を設置
1986年4月	京田辺校地設計にあたりバリアフリー化を企図、図書館内に点字室と対面朗読室を開設
1991年	視覚障がい者用ワープロ購入と同時に図書館（今出川校地）内に点字室を設置
1992年4月	教務課（今出川校地）に常勤の点訳・墨訳担当者を配置
2000年5月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2000年3月）を契機として「障がい学生支援制度」がスタート（予算管理は教務課） <ul style="list-style-type: none">・障がい学生の把握と相談窓口・正課授業保障の体系化（教科書点訳は基本的に大学が責任をもつ）・障がい学生の人的支援制度(1)「障がい学生支援連絡会」を設置(2)学生課（京田辺校地）によるボランティア（ノートテイク・パソコン通訳）学生派遣(3)奨励金制度の導入・懇談会の開催
2001年10月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2001年8月）を契機として「講義補助」から「講義保障」へ制度の謳いなおし <ul style="list-style-type: none">・講義保障のために、ボランティアスタッフ（主に視覚障がい学生及び肢体不自由学生へ学生生活支援（無償））に加え、アシスタントスタッフ（聴覚障がい学生への講義通訳（有償））制度を導入
2002年	予算管理を学生課（京田辺校地）へ移管 「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更
2002年1月	学生課（京田辺校地）に常勤の手話通訳担当者を配置
2003年	「障害」の「害」について、人を意味するときのみ「障がい」とする旨を決定、採用 大学院生に対しては可能な範囲で補助をする「講義補助」という立場を明確化
2003年4月	入学式・卒業式に手話通訳を導入
2004年4月	両校地に常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置 肢体不自由者（電動車イス専用）用トイレ設置
2004年5月	学生部再編により学生支援センターへ名称変更
2004年10月	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）への連携協力開始
2005年3月	両校地の全ての教室棟扉・トイレに点字シールと対応墨字シール貼付
2005年5月	JR福知山線脱線事故で受傷した学生に対して「障がい学生特別支援体制」で対応
2005年8月	Challenged キャンプ開始
2005年9月	学際科目（現・複合領域科目）「学びのバリアフリーを考える－障がい学生支援－（聴覚障害への講義保障を通して）」の運営協力を開始
2006年10月	日本学生支援機構（JASSO）の「障害学生修学支援ネットワーク事業」に拠点校として連携協力開始
2007年4月	ボランティアスタッフ（無償）とアシスタントスタッフ（有償）を統一し、「サポートスタッフ」として全支援有償化
2007年10月	障がい学生キャリア支援セミナーをキャリアセンターと協力して開催
2008年4月	「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編 障がい学生支援窓口を「障がい学生支援室」として再編

- 2008年10月 第4回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2008」において Challenged キャンプの発表で PEPNet-Japan 賞を受賞
- 2009年4月 学生支援機構を設置し、4つのセンター（学生支援・保健・カウンセリング・キャリア）が連携し、組織的かつ総合的な学生支援体制を構築
- 2009年11月 「障がい学生支援室」を学生支援センター京田辺校地学生支援課に一元化
- 2010年11月 第6回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2010」において「心のバリアフリーをめざして」および「Challenged キャンプ」の発表で準 PEPNet-Japan 賞を受賞
- 2011年4月 日本学生支援機構（JASSO）「平成22（2010）年度障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業」『理工系大学院における聴覚障害学生の支援について』調査報告書発行
- 2011年5月 PEPNet-Japan 連携協力校として東日本大震災により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
- 2011年9月 障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウムを日本学生支援機構と共催
- 2011年10月 PEPNet-Japan 「障害学生支援大学長連絡会議」に開催校として協力
- 2012年12月 第8回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2012」において「同志社の実り～そだてる・つながる・ひろがる～」の発表で2度目の PEPNet-Japan 賞を受賞
- 2013年2月 同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）制定
- 2013年4月 学生支援センター障がい学生支援室を大学事務機構規程に明記
- 2013年6月 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）制定
- 2013年12月 PEPNet-Japan が「平成25年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰」において「内閣総理大臣表彰」を受賞
- 2014年4月 今出川・京田辺両校地フリーアクセスマップ製作
- 2014年10月 一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD JAPAN）発足 [発起校として参加]
- 2014年12月 2015年度から「人」を意味するときに加え「人の状態」を表す場合も「障がい」と表記を統一することを決定
- 2015年2月 同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
- 2015年6月 PEPNet-Japan 遠隔情報保障事業モデル校採択
- 2015年11月 大学生活協同組合におけるインターンシッププログラムを実施
- 2015年12月 同志社大学障がい学生支援室内規制定
- 2016年4月 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）施行
- 2016年6月 PEPNet-Japan 特別プロジェクトとして熊本地震により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
- 2017年1月 同志社大学障がい学生支援調整委員会に関する申合せ制定
- 2017年11月 同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
- 2018年4月 障がい学生支援制度を一部変更し、合意内容確認書等を導入
- 2020年5月 障がい学生支援制度発足20周年
- 2020年11月 第16回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援実践事例コンテスト2020 特別編」でサポートスタッフが「最優秀作品賞」を受賞
- 2021年2月 スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室内規制定
- 2021年3月 ハリス理化学館同志社ギャラリー第22回同志社ギャラリー企画展「『支え合う志』をつないで－障がい学生支援制度発足20周年－」（2021年3月19日～5月23日）
- 2021年4月 改組により「スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室」設置
- 2021年6月 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の一部改正・公布
- 2021年8月 障がい学生支援制度発足20周年記念シンポジウムを開催
- 2022年8月 3年振りに Challenged キャンプを宿泊型・対面形式で催行
教職員向け身体障がい体験プログラムを実施

今出川校地



京田辺校地



同志社大学 学生支援センター スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室 (SDA室)

今出川校地 寒梅館1階

〒602-0023 京都市上京区烏丸通上立売下ル御所八幡町103

Tel: 075-251-3273

E-mail: jt-care@mail.doshisha.ac.jp

*2023年度中に明德館へ移動します

京田辺校地 成心館1階

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3

Tel: 0774-65-7411

E-mail: jt-care@mail.doshisha.ac.jp

本パンフレットはユニバーサルデザイン(UD)フォントを使用しております。
ユニバーサルデザイン(UD)フォントとは、より多くの人へ適切に伝えられるよう、ユニバーサルデザインの視点から見やすさ、読みやすさを配慮・確認し、制作されたフォントです。

